これからの酪農経営にかける夢

長崎県立島原農業高等学校 農業ビジネス科　3年　永田 将輝

私の住む長崎県島原半島は火山の恵みにより土壌が肥沃であることから農業が盛んで、長崎県の農業産出額の約４割を島原地域が占めています。大根や人参、レタス、いちごなど多種多様な品目が生産されています。また、牛、豚、にわとりなどの畜産も盛んです。我が家は島原市は雲仙岳の山々と眉山を背に有明海を望む場所にあり、その中で、我が家は酪農と和牛繁殖を営む専業畜産農家です。父、母、従業員３人で乳牛９０頭、和牛３５０頭を飼育しています。

私は10歳頃から子牛のミルク作りや牛舎の掃除を手伝っており、近くにはいつも牛がいる生活をしてきました。その中で、いつしか父の後継者になりたいと考えるようになりました。そして、畜産や農業のことが学べる島原農業高校へ入学し現在、高校３年生となり真剣に将来の事を考えるようになりました。そんな時、専門科目である「農業経営」の授業で先生の一言に大きな衝撃を受けました。それは、これから「畜産経営」を志す者、「賢くない人は絶対跡を継ぐものではない!!」と断言されたのです。その言葉には、教科担当の先生の実家のお話で、長年にわたり酪農経営を行ってきたが、経営がうまくいかずに大きな負債を負い家族全員が苦労された経験を話して頂きました。本当はその担当の先生も大学を卒業するまでは酪農後継者を夢見ていたとのことでした。

その話を聞いて、私はものすごく不安になりました。「果たして今の私が本当にできるのか」「跡継ぎとして自分は向いているのか」という気持ちになりました。しかし、後継者になる決意は変わっていません。父の後ろ姿を小さい頃から見てきた自分は今、頑張っている父の後ろ姿を尊敬しています。若い頃、早くして祖父が亡くなり、大きな苦労をして、現在の規模まで成し遂げた父のようになりたいと思っているからです。

それでは、私は何をすれば良いのか、残りの高校生活をどのように過ごせば良いのか考えました。学校ではテニス部に所属して日々の部活動に打ち込んで来ました。引退した今では毎日親と一緒に朝晩牛舎の仕事を手伝っています。その中で父が「なかなか種付きが悪か・・どけんすればよかとやろか」という父のなにげない言葉が聞こえてきました。そのことを畜産の授業の中で学校の先生に話したところ、解決策のヒントになるかもしれないから「オンラインになるけれど直接、大学の先生の講義を受けてはみないか？」というものでした。その先生は畜産における繁殖学の権威である「北海道酪農学園大学」の学長でもある堂地先生という方です。

最初は、大学の先生の講義が今の自分に理解できるのか心配でしたが、せっかくのチャンスなので受けてみることにしました。日本の端と端の北海道と長崎とのオンライン

講義、本当につながるかなと思いつつ実際、講義を受けてみて、とてもわかりやすく説明して頂き、高校生の私でも「牛の繁殖」の重要性が多少分かりました。特に我が家の課題である「受胎率の低下」が大きな課題でしたので、そこを質問すると、解決策のアドバイスを頂くことが出来ました。まず分娩後の卵巣の状態をいち早く元の状態に戻すこと、その為にはボディコンディションを見極め飼養管理を行うこと、次に長崎は気温も高い地域なので、夏場の暑熱対策をしっかりおこなうこと、その為には夏前から徐々に行い牛を慣らせることが大事であると教えて頂きました。慣れてくれば夏初旬より8月の受胎成績が良くなる場合もあると聞いてびっくりしました。早速実践したいと考えています。

次に家を継ぐにあたって考えた事が二つあります。まずは、畜産経営における「働き方改革」です。今まで生き物相手とはいえ365日働きづめの父と母の姿を見てきました。畜産後継者もどんどん減っていく中で、これからの畜産も他産業並みに休みが取れる魅力ある経営にしていかなければいけないと思うからです。自らの働き方もありますが、我が家には3人の従業員も働いていますので、このことは、これからもっと大きく経営をしていくことを考えれば大きな意味を持っていると思います。

畜産経営において、繁殖が一番重要であると授業の中でも教わりました。いかに発情を的確に見つけて種付けをして分娩させるかという基本的な事ができないと安定した経営にならないからです。発情を見極めるためには長い経験と観察力が必要と言われています。そこで現在、本校でも導入している牛の行動パターンで発情・分娩を予測する「牛歩システム」や分娩室にカメラを取り付け自宅からスマホで牛の状態を観察する「分娩監視カメラシステム」、学校でも導入してる「搾乳ユニット自動搬送装置（キャリロボ）」や「自動給餌装置」などの最新の機械を導入することにより、ゆとりのある労働環境と生産性の向上が実現できたらと考えています。

2つ目に、「経営学の必要性」です。授業においても担当の先生は力説されていました。特に最近は飼料価格の高騰で収益がどんどん減っています。離農する酪農家も増えてきていると聞いています。数年前と比較しても30％以上値上がりして利益率も大幅に下がっています。いかに生産コストを下げていくかが重要であり、さらにお金の流れをつかむことが、より大切であると学びました。例えば飼料費・光熱費・機械費などなど経費を数％削減させることが出来たら、我が家の経営規模で言うと、数百万円単位で違ってくると言うことを理解する。飼料の購入単価を何百円下げるためには何ができるかと考える事。更にスケールメリットである規模拡大をすることで1頭あたりのコストをどのくらい下げる事ができるかということ等を考える必要性があると感じました。将来は現在の規模を1.5倍として売り上げ2億円、利益を2倍にしたいと考えています。「儲かる畜産」を実現するためには、時代の流れを読み、常にコスト意識をもつことが大切であるということ、まずは「損しない

畜産」の実現を、そして「儲かる農業」へのステップアップを目指していきたいと思います。

私は、これから畜産後継者として歩んでいくことになりますが、その中で私たち動物を飼育する者が忘れてはいけないことがあると考えています。それは家畜という経済動物である「命」に対して「責任」と「感謝」の気持ちが大切であるということです。私は、これまで、我が家で飼育されている牛が肉として出荷される姿や病気や怪我で死んでいく牛、乳が出なくなり廃牛となる運命の多くの牛などを見てきました。私は、その限りある「命」を無駄にしない酪農経営を実現したいと考えています。そのためには、私たちが生産する美味しい牛乳、お肉がどのような過程で生産されているかを消費者の方に知ってもらう事も大切なのではないかと思います。学校の授業の中で観光牧場や酪農体験ファームなどに取り組んでいる事例を知りました。このような取り組みが出来れば消費者と一緒に食の重要性、酪農の素晴らしさを多くの人に伝えることが出来るのではないかと夢を膨らませています。

卒業後は大学に進学して専門の勉強をして我が家に戻って来ようと決意を新たにしています。ここ島原の地で、祖父から父そして私とつないでいく酪農経営を次の世代にバトンタッチできるように頑張っていきたいと思います。